

むつごろう通信

4号

2003年

9月30日発行

(寄稿)

有明海の粘質状浮遊物について

熊本県水産研究センター
水産審議員・次長
宮原 才郎

5月の連休明けに有明海のあちこちで正体不明の粘質状浮遊物が発見されました。北は佐賀県・福岡県の地先から、島原半島・熊本県沿岸を経て、南は天草の大矢野島や有明町の地先で浮遊して発見されました。さらに各地で、海底近くに浮遊していた物が漁網等に絡まって、操業に支障をきたしたところもありました。

有明海に面した4県の水産関係試験研究機関では、漁業者や海上保安部からの通報を受けて、それぞれ独自に調査を行いました。熊本県水産研究センターでは、漁業者や漁協へのアンケート等を行って実態の把握に努めるとともに、成分の分析等も行ってみました。

一般成分等の分析結果では、生物由来の物質であることは確認できましたが、夾雑物の影響で動物由来か植物由来であるかは判断できませんでした。しかし、生物の粘質物に詳しい熊本大学教育学部の浅川牧夫教授に正体の解明をお願いしましたところ、「この粘質物はアルカリ溶液に溶解し難く、植物由来の粘質物とは異なる特徴を示す。」とのことでした。



腹足類のものと思われる卵囊塊
(長さ約40cmで両端は砂中に固定されている)



粘質状浮遊物

そこで、「アルカリ溶液に溶けにくい」という性状を手がかりに、似たような性状を持つ生物を探してみました。その結果、長崎県の調査で幼生や卵が粘質物に絡まっていたとされる「タマシキゴカイ」の卵囊塊が同様の性状を示したほか、宇土半島の地先で採取した腹足類のものと思われる（ふ化幼生の写真を熊本大学沿岸域環境科学教育研究センターの逸見泰久助教授に見ていただきました）卵囊塊も、同じような性状を示しました。

そのほか、同センターの秋元和實助教授からは、「ちょうど同じ時期に有明海の中央部で底泥の調査をしていて大型のゴカイのものと思われる棲管を多数みつけた。」との情報も届けられました。

以上のような調査結果などを有明4県と（独）

西海区水産研究所が持ち寄って検討し、現時点では次のようにまとめました。

「有明海において、平成15年5月6日に発見され、5月20日頃まで継続が確認された粘質状浮遊物は、介類や底生生物の生殖活動等に伴って海水中に放出された粘質物が、変質しながら海底上や海水中を浮遊する間に、底泥や動・植物プランクトン等が付着したものと考えられた。」

しかし、確定した結論には至っておりません。関連すると思われる情報をお持ちの方は、当水産研究センターまで提供いただければ幸いです。